# アイリス

　糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。８時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

　身体が痛いのは、硬い床で寝たせいか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファーベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――…

小さな、円い容器をくるりと廻す。ほんの少しだけ、芳しい香りが鼻孔をくすぐる。あまり使われていない紅に躊躇いもなくその白い指が触れる。掬い取った紅は、指の主ではなく、私の唇をするりと撫でていった。一度。二度。三度。彼女と同じ色に、なった。